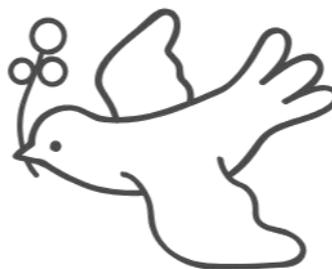


■わたしたちの平和宣言



私たちの考える平和

平和に形はない
だから
平和への学びは終わらない
私たちは平和について
考え続けなければならない
誓いを胸に
学校ごとに平和宣言をします





79年前の8月6日午前8時15分、広島に原子爆弾が投下されました。その瞬間、一瞬にして広島街が破壊され、多くの人々の日常が奪われました。

今年の8月5日から7日にかけて私たちは広島派遣に行き、被爆者は自分のやりたい事はなにもできず、生きることさえ苦しかったことを学びました。

そして、私たちは戦争がなく仲良く過ごし笑顔で暮らせること、また自由に発言できる事が平和だと考えます。

私たちは日常生活を奪ってしまう過ちを繰り返さないよう、原爆の恐ろしさや、平和の尊さを伝えていくことを誓います。

我孫子中学校 見城 さくら・日高 颯・柏田 健



今から79年前の1945年8月6日、広島に一発の原子爆弾が投下されました。8月9日には長崎にも。多くの尊い命や日常生活が奪われました。爆風や熱線によって一瞬で亡くなってしまった人、後遺症により永く苦しみながら息絶えた人。体だけでなく、心に深い傷を負った人もたくさんいました。

私たちは昔と比べて、豊かで便利で文化的な生活を送れるようになりました。様々な手段を通じて、学ぶことは格段に増えたはずですが。しかし今もなお、世界では戦争が起こり、核兵器の開発が進められています。平和な世界にしていくために、未来に向けて何をしていけばよいか。多くの情報が溢れる中、一人一人が身近な暮らしの中で正しいことを知り、行動していくことがとても大切です。

広島や長崎で起きた過ちを二度と繰り返さないために。戦争の悲惨さや平和の尊さを胸に刻むよう、次の世代へと語り継いで行くことを、私たちは誓います。

湖北中学校 永野 ちとせ・藤本 道大・伊藤 きなり



79年前の8月6日、たった1発の原子爆弾によって緑豊かな広島街、いつも通りの日常を送っていた人々の命は一瞬にして失われてしまいました。生き残った人も身体に火傷などの大きな傷、心には大切なものを失ってしまった苦しみ、いつ白血病になるのか分からないこと、差別や偏見に対する恐怖を残されてしまいました。

今自分たちが平和に生きているから良いのではなく、世界で今も起きている、戦争、紛争に目を向け、この悲劇を繰り返さないためにも、79年前の惨状、戦争の恐ろしさを伝え、全員が理想とする平和な世界への第一歩を踏み出すことを誓います。

布佐中学校 片岡 祭・吉田 航汰



79年前の8月6日、ヒロシマを襲った1発の原子爆弾によって、少なくとも14万人もの人々が亡くなり、その後も後遺症を負った方、遺族の方々がいまでも苦しんでいます。たった1発の原子爆弾が数えきれない人の人生を狂わせ、大きな傷跡を残しました。今回の派遣事業で私たちは、当たり前はいつも必ず当たり前とは限らない、そう感じました。

平和記念資料館を訪れた時に見つけた手記には、次の日も生きることができると思っていた人たちの日記が書かれていました。次の日に原子爆弾が落とされるとは夢にも思っていなかったはずです。普段の生活が前触れなく終わってしまう、戦争はこんなにも残酷なのかと打ちひしがれました。同時に、「明日」は誰もが迎えられるものではないと感じました。

学校に登校して友達と会って、家に帰ることができる。これこそがなによりも尊く、幸せなのだとは私たちはわかりました。亡くなった方々のご冥福をお祈りするとともに、私たちは戦争の恐ろしさ、そして、平和の大切さを伝え続けることを誓います。

湖北台中学校 岡本 健一郎・神野 泰智・富越 菜々子

久寺家中学校 わたしたちの 平和宣言



79年前、まだ私たちが生まれていない頃、広島、長崎に世界で初めての原子爆弾が投下されました。よりによってなぜ、百何十カ国ある中で日本が初めてなのか、そして戦争をなぜ国境を越えてまで、犠牲者を出してまでやらなくてはいけないのだろうか。誰も住みそうにはない、姿が変わり果てた原爆ドームを前に考えさせられた気がしました。

そのような考えをする必要がない今は果たして平和と言えるのでしょうか。現在もなお、他国で戦争が行われています。それに比例し、信じられない程、無差別に死んでしまった人たちがたくさんいます。そのため、これからの未来を託された私たちにとって最も重要なことはそれを放っておかず、後世に語り継いでいくことです。私たちは今ある当たり前を当たり前とせず、平和の大切さ、戦争の愚かさを伝え続けていくことを誓います。

久寺家中学校 大庭 直翔・宮本 陽音



1945年8月6日、広島市に投下された“一発”の原子爆弾によって町も人々の命も明るい未来も奪われました。

私たちは実際に広島市を訪れ、被爆した建物や被爆者のお話を聞き原爆の恐ろしさを感じるとともに、今の生活がいかに貴重であるかを痛感しました。

悲しみと苦しみに満ちた時代を経て、ようやく私たちは今の平和な日常を手に入れています。

当たり前の日常があること、安心して大切な人と笑顔で過ごせること。それが私たちの考える平和です。実際に被爆した方の中には当時の苦しい記憶や平和への思いが詰まっています。

しかし、原爆投下から79年経った今、被爆者の数は減ってきています。笑顔でいられる日常があることがどれだけ幸せなことかを学ぶためにも私たちが彼らの声を語り継ぐことが必要です。

私たちは原爆の悲惨さを胸に刻み、平和の尊さを未来に繋いでいくことを誓います。

白山中学校 島 衣伶奈・伊藤 明日香・細川 星姫

■令和6年度 平和事業の記録



▲「平和の集い」派遣報告を終えて

被爆79周年我孫子市平和祈念式典

- 日時 : 令和6年8月10日(土) 午前11時から正午
場所 : 生涯学習センターアビスタ ホール
次第 : 開式の辞
千羽鶴の奉納
市長式辞
来賓挨拶・紹介
代表献花
黙祷
詩の朗読
我孫子市平和都市宣言の読み上げ
 広島派遣副団長 湖北台中学校 岡本 健一郎
広島市派遣中学生の紹介・報告
 広島派遣団長 白山中学校 島 衣伶奈
閉式の辞
参列者献花

被爆79周年我孫子市平和祈念式典に参列した約100名は、原爆犠牲者に哀悼の意を捧げるとともに、核兵器廃絶と平和を祈りました。

原爆の恐ろしさや悲惨さ、平和の尊さを次の世代に伝えていくため、市では若い世代にも平和事業に携わってもらう工夫をしています。

◆我孫子市長 式辞◆

本日は、被爆79周年平和祈念式典に際し、ご来賓各位並びに我孫子市原爆被爆者の会の皆様のご臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。また、日頃から市の平和事業にご尽力いただいております平和事業推進市民会議、歴代の派遣中学生の皆さんに、この場をお借りし、感謝を申し上げます。

広島と長崎に原子爆弾が投下されたあの忌まわしい日から79年が過ぎました。原爆並びに先の大戦で犠牲となられた方々の御霊に対し、謹んで哀悼の誠を捧げます。

原子爆弾は、一瞬にして多くの尊い生命を奪い、辛うじて一命をとりとめた人々にも、心身共に生涯消えることのない深い傷を残しました。同じ過ちを二度と繰り返さないためには、当時の悲惨な記憶と記録を後世へ伝えていくことが重要です。

今年で20回目となる被爆地への中学生派遣では、市内6校の代表生徒16名とともに、8月5日から7日まで、広島市を訪問してまいりました。8月6日の平和記念式典に参列したほか、資料館の見学や被爆された方のご講話など現地での体験を通じて、派遣中学生たちは、戦争や原爆の恐ろしさを知り、平和の大切さを感じてくれたと思います。

来週8月15日、終戦から79年目の日を迎えます。戦争体験者や被爆者の方々は年々少なくなっています。市内では、我孫子市原爆被爆者の会の皆様が、「平和の記念碑」の建立や平和祈念式典の開催、平和祈念の折り鶴展、手賀沼公園への陽光桜の植樹など、長年にわたり被爆の実相を伝える活動に取り組んでこられました。しかし、高齢化とこれに伴う会員数の減少により、活動の継続が難しくなり、令和4年3月、气象台記念公園への陽光桜の植樹をもって、その活動を閉じられました。私たちは、歴代の会長、会の皆さんの思いをしっかりと受け継いでいくため、この平和祈念式典を、我孫子市原爆被爆者の会の名を残して開催しています。

我孫子市は、唯一の被爆国として、平和都市を宣言している自治体として、今後も、被爆者の方々の平和への思いを胸に刻みながら、広島や長崎に派遣された経験をもつ若い世代をはじめとする多くの方々とともに、平和事業に取り組んでまいります。

結びに、核兵器のない世界と恒久平和の実現を強く願うとともに、本日もご臨席の皆様方のご健勝を心から祈念申し上げまして、式辞といたします。

令和6年8月10日 我孫子市長 星野 順一郎

◆我孫子市の平和事業パネル展・平和祈念の折り鶴展

平和祈念式典の開催に合わせ、「我孫子市の平和事業パネル展・平和祈念の折り鶴展」をアビスタで開催しました。我孫子市で実施している平和事業の紹介、市民の皆様から寄贈していただいた千羽鶴、我孫子市立湖北小学校の6学年の皆さんが授業の一環で作成した平和と戦争に関わる作文などを展示しました。

<展示期間> 8月8日(木)～8月22日(木)



▲寄贈していただいた千羽鶴



▲平和と戦争に関わる作文

とうろうに平和の願いを込めて

戦後79年が経過し、戦争体験者や原爆の被害に遭われた方が少なくなっているなか、平和の尊さを継承することの重要性が増しています。

広島と長崎に原子爆弾が投下され、第二次世界大戦が終結した8月に、平和について考えてもらうために、主に小中学生に向けたイベントを企画しました。

通常は小学6年生を対象に実施しているリレー講座を、どなたでも受けられるようにアレンジした元派遣中学生によるリレー講座特別版、リレー講座を受講してみて感じた平和への想いを描いた灯籠作り、作った灯籠を手賀沼親水広場じゃぶじゃぶ池で流す灯籠流し体験を実施しました。



▲リレー講座特別版



▲灯籠作り



▲灯籠流し体験



▲じゃぶじゃぶ池に浮かぶ灯籠

平和の集い～我孫子から平和を願う～

日時 : 令和6年12月1日(日)午後1時30分から午後4時

場所 : けやきプラザ ホール

司会 : 平和事業推進市民会議委員

根本 茜梨(大学2年、平成30年度広島派遣中学生)

山元 誠人(高校3年、令和2年度広島派遣中学生)

次第 : 開会

主催者挨拶

我孫子市長 星野 順一郎

我孫子市平和事業推進市民会議 会長 桑原 俊晴

第1部 令和6年度派遣中学生による報告

第2部 我孫子中学校演劇部による劇

「戦争を知らない子どもたち」

派遣中学生による報告会は、派遣事業が開始した平成17年度から、標題を変えながら続いてきました。今年度は約280名が来場し、広島派遣報告と我孫子中学校演劇部による劇をご覧いただきました。中学生たちの発表に、多くの感動の聲が寄せられました。

この事業は市と我孫子市平和事業推進市民会議の共催事業で、準備や当日の運営を共同で行っています。また、司会を市民会議委員の大学生1名と高校生1名が務めました。



▲司会と桑原会長挨拶



▲星野市長挨拶

◆第1部 広島派遣中学生による報告◆

令和6年8月に広島市に派遣した中学生が、現地で学び感じたこと、平和について考えたことなどを発表しました。派遣報告の最後は、中学校ごとの「平和宣言」で締めくくられ、中学生たちは自分の言葉で平和への思いを語りました。当日の発表は16名のうち13名で行いました。



▲我孫子中学校



▲湖北中学校



▲布佐中学校



▲湖北台中学校



▲久寺家中学校



▲白山中学校

◆第2部 我孫子中学校演劇部 「戦争を知らない子どもたち」

市内中学校唯一の演劇部である我孫子中学校演劇部は、平成25年から毎年、戦争や平和をテーマにした演劇を通して、観る人に平和の尊さを伝え続けています。今年も16名の中学生たちが一生懸命演じました。

<あらすじ>

太平洋戦争が激しさを増す中、空襲におびえながらも日々明るく懸命に生きる健太。

戦後50年、1995年の学校に退屈しながら、毎日をなんとなく生きる由希。

生きている時代が違う二人がひよんなことから入れ替わってしまう。

戦争を知らない現代の子どもが悲惨な戦争の時代を生きたら…

戦時中の子どもが物の豊富な現代を生きたら…

戦争とは、平和とは、そして今を生きるとは…

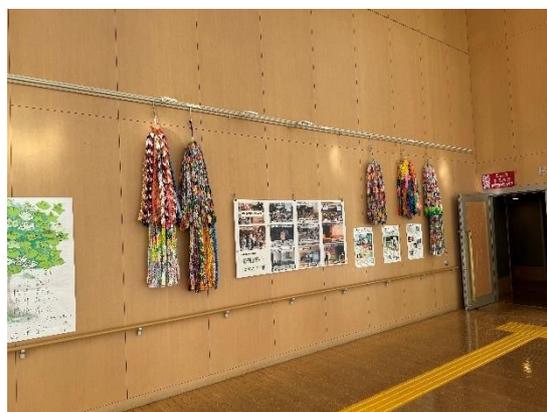


◆「平和の集い～我孫子から平和を願う～」展◆



▲アビシルバの展示の様子

(平和首長会議主催『子どもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト』入賞作)



▲けやきプラザ 第1ギャラリーの展示の様子

(中学生派遣事業・リレー講座・平和事業推進市民会議の紹介)



▲けやきプラザ 第2ギャラリーの展示の様子

(広島平和記念資料館所蔵「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真ポスター」)

広島・長崎派遣中学生リレー講座「未来を生きる子どもたちへ」

実施期間 : 令和6年6月から令和7年1月まで

実施場所 : 市内の小学校13校(6年生対象、計32クラス)

講師・アシスタント参加人数 : のべ125人

広島・長崎派遣中学生リレー講座は、戦後70年記念事業として被爆地派遣経験者の学生たちが企画し、平成27年度に開始しました。広島・長崎で学び、感じたことを若い世代に伝え一緒に平和について考えてもらうため、自らが講師となり、内容を工夫しながら小学6年生に授業を行っています。

事業開始から10年間で9,600人以上の児童が受講しており、「リレー講座を受講したことをきっかけに派遣に参加した」という中学生もいて、平和のバトンが次世代につながっています。



▲R6.6.19 我孫子第一小学校



▲R6.6.22 湖北台西小学校



▲R6.6.22 新木小学校



▲R6.9.28 布佐南小学校



▲R6.10.12 根戸小学校



▲R6.10.12 布佐小学校



▲R6.10.22 湖北台東小学校



▲R6.11.13 高野山小学校



▲R6.11.16 並木小学校



▲R6.12.9 湖北小学校



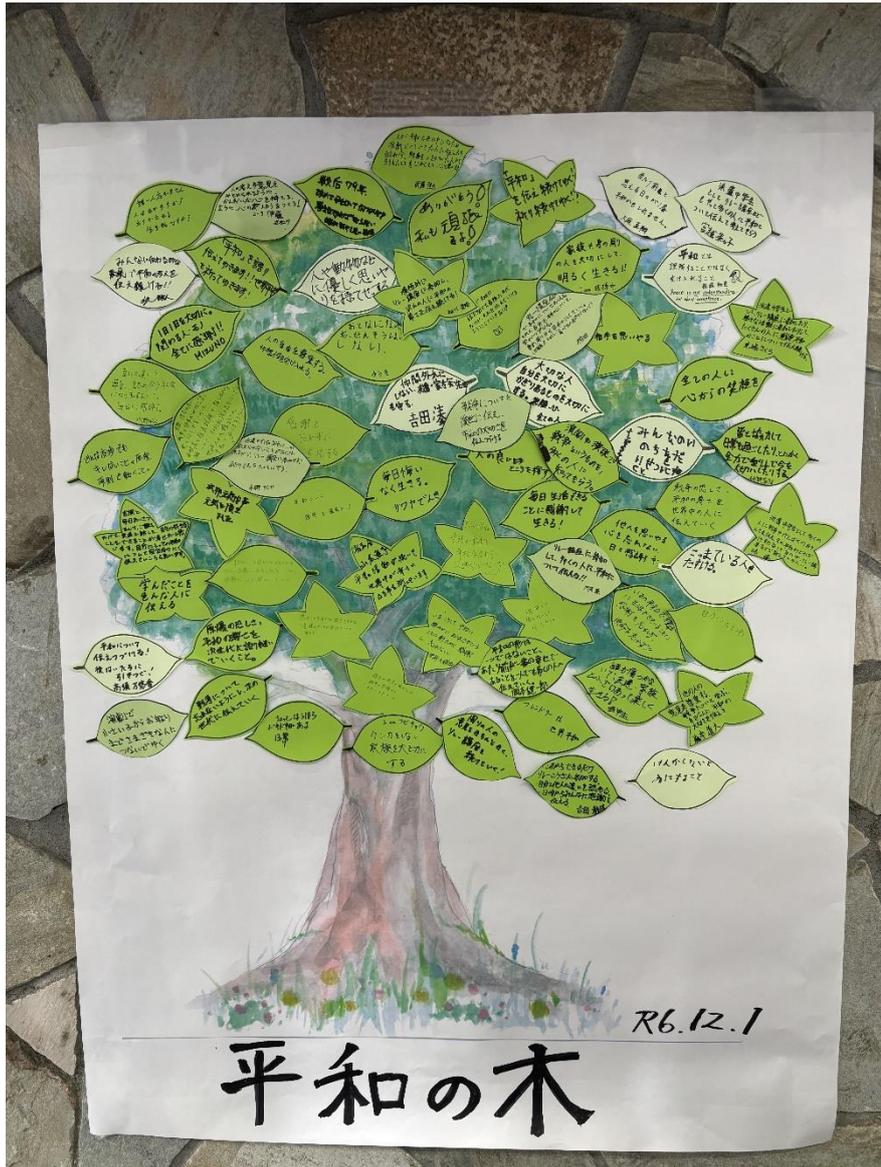
▲R7.1.10 我孫子第四小学校



▲R7.1.20 我孫子第二小学校



▲R7.1.28 我孫子第三小学校



▲平和の集いの来場者で完成させた平和の木

◆我孫子から平和を願う～我孫子市平和事業ブログ～◆

我孫子市の平和事業や平和事業推進市民会議の
取組みを紹介しています。

令和6年度広島派遣レポートや、「平和の集い」の
様子を紹介しています。

<http://peace-abiko.blogspot.com/>



■平和祈念文集



▲千羽鶴を奉納する我孫子市派遣団

広島派遣を終えた派遣中学生による感想文です。
広島で学んだこと、感じたことを率直な自分の言葉で記しています。



『広島派遣を通じて』

私は広島派遣を通じて、平和が決まった形で存在するものではなく、人それぞれ異なる考え方があることを学びました。私にとっての平和は、戦争がなく、安心・安全な暮らしが送れること、そしてこれまで通りの生活が続けられることです。これらは広島での体験を通して深く知ることができました。

1日目、私は平和記念公園およびその周辺を見学しました。まず、原爆ドームを訪れ、写真では伝わらないリアルな現状を目にしました。例えば、残された部分と破壊された部分の境目が溶けている様子を見て、これが爆風ではなく熱線によるものであることを知りました。原爆ドームを見ると3000度を超える熱線の恐ろしさが伝わりました。次に爆心地である島病院に向かいました。被爆直後の島病院の写真を見て、原子爆弾の恐ろしさを改めて感じました。病院が全壊している一方で、鳥居などの平面積の小さなものはあまり壊れておらず、建物が壊れるかどうかは材質だけでなく構造にも関係があると学びました。また、平和の灯を見て、核兵器がなくなるまで燃やし続けられるという話を聞き、核兵器の恐ろしさや核兵器廃絶への強い思いが込められ、世界の人々が忘れられないようにしているのだと感じました。

その後、被爆体験者である佐渡さんのお話を聞きました。その話を通じて、被爆後の生活や心の傷の深さを知り、原爆の威力は予想を遥かに超えて人々の心にも傷を作ること、そしてその恐怖と苦しみは被爆者にしか分からないものであると痛感しました。この思いを後世に伝えることが私たちの責務であると強く感じました。

2日目の平和記念式典では、外国からも多くの方が参加しており、「平和」が国や人種を超えた共通の意識であることを実感し、とても嬉しく思いました。その後、千羽鶴を奉納し、世界の恒久平和を祈りました。また、インタビューを通して、日本人だけでなく様々な国の方にも平和についての考えを聞きました。私たちの班は3名の方にインタビューをすることができました。「あなたの考える平和とはなんですか？」という質問に、戦争がなくなること、さらに、それに加えて今まで通りの暮らしができることを挙げている方が多い印象でした。「今まで通りの暮らし」は人によって様々異なるので、平和の捉え方も人それぞれであると改めて感じました。

平和資料館では、被爆後の物品や資料を通して、原子爆弾の影響や放射線による症状

について深く学びました。特に、展示されていた絵や放射線に関する情報について時間をかけて見学しました。絵は写真とは異なり、画家の感情が直接反映されており、その感情を通して被爆者の苦しみや悲しみを感じ取ることができました。また、放射線は原子爆弾の中で最も恐ろしい要素だと感じました。放射線は、被爆直後に症状が現れる場合もあれば、長い時間をかけて現れる場合もあり、被爆者に長期的な苦しみを与え続けました。特に「死の斑点」と呼ばれる血の斑点が現れると、数日以内に命を落としてしまうという事実が、当時の人々にとってどれほど恐ろしいものであったかを物語っていました。爆破によって大切な家族や友人が亡くなるという苦しみで終わらず、被爆によって家族や友人を失っていくといった残酷で想像することすら恐ろしい現実を知り、涙がこぼれました。

3日目は、多門院を訪れました。多門院の鐘楼は爆心地に最も近い木造建築物であり、回れやすいと思われていましたが、風通しが良かったために壊れずに残っていたことを知りました。ここでは、毎朝8時15分に鐘が鳴らされ、平和の灯と同じように平和の象徴となっていることを知り、深く心に残りました。最後に訪れた本川小学校平和資料館では、広島に原爆が投下された理由や、生き残った小学生についての話を聞きました。その小学生は、クラスメートや親友を失ったにもかかわらず、たくましく生き抜いた姿に私はとても感動しました。

広島での体験を通じて、私たちは世界から核兵器を無くし、同じ過ちを繰り返さないようにしなければならないことを学びました。いつも通りの平和な暮らしが出来るよう、原爆により亡くなった人々が安心できるように核兵器の廃絶は必要です。平和の灯が使命を果たし、その役割を終える日が一日でも早く訪れることを、心から願っています。



『未来へ育む気持ち』

私はこれまで、原爆投下について深く考えたことはありませんでした。しかし、広島派遣に参加したことで、戦争の恐ろしさや原爆によって一瞬にして多くの尊い命が失われたという事実を目の当たりにしました。そして、普段考えることもない平和とは何か考えることが出来ました。平和とは言葉でいうことは簡単ですが、実は複雑で、人それぞれあるということが分かりました。今、私たちが当たり前に行っていることも周りから見れば、すごく平和でうらやましいことなのだと分かりました。

私が今回の広島派遣で一番印象に残った場所は平和記念資料館で、実際原爆の被害に遭い、亡くなってしまった人や苦しんだ人たちの写真や遺品、絵などが展示されており、とても生々しく、当時の広島を物語っていました。

被爆した方のお話をお聞きし、原爆が落とされた後、身体や心に傷を負ったまま生きていくこと、それが想像を絶する堪えがたい現実であったことを思い知りました。目の前に、おびただしい遺体ならび、毎日火葬される現場を見続けること。その場で感じるにおい、虚しさ、悼み、悲しさは言葉にならなかったでしょう。食べ物や医薬品も足りず、亡くなった家族の遺体についたウジを割り箸でとってあげているときの気持ちは計り知れないです。想像するに、地獄にいるような日々だったと思います。

私には堪えられない痛みや悲しみを負った人たちの思いを忘れてはいけません。未来に受け継いでいかななくてはならないと身に染みて感じました。そして、こんな残酷な出来事が二度と起こってはいけませんと思いました。

広島で亡くなった佐々木禎子さんをはじめとする、幼くして被爆し、未来を奪われた子たちも大勢いたことも知りました。禎子さんが、闘病中に「元気になりたい。」と願い、希望を託してひとつひとつの鶴に祈りを込め、折り鶴を折ったことにも心が痛みました。健康で、整った環境の中で私たちが幸せに生きられていることに感謝し、それをかみしめながら生きていくことが必要だと感じました。

この広島派遣で、一番強く思ったことは、戦争はどんな理由があってもやってはいけないことだということです。戦争をすることに良いことなんて一つもありません。ただ、悲しみと苦しみが作られていくだけということも多くの人に理解して欲しいと感じました。人と人が傷つけ合うことに意味などあるのでしょうか？そのようなこと

は決してある訳がないのです。私は、広島派遣を通して、戦争をすることがどれほど
の人を傷つけるのか、戦争がどれほど馬鹿げたものなのかを目で見、肌で感じました。
それにもかかわらず、今現在も世界の一部の国では戦争やテロによる殺害や虐殺が起
こっています。何の罪もない人々が戦争に巻き込まれ、命を落とし、未来を奪われて
います。今すぐに止めて欲しいです。

そんな中、私たちにできることは何か？先人たちが私たちに伝えてくれた、広島や
長崎の原爆のような戦争による被害がどれほど多くの人の命を奪い、どれほど悲惨だ
ったのかなど。過去の過ちを繰り返さないためにも、戦争は悪であること、核兵器を
根絶することを伝え続けることです。私たちは戦争を経験した人たちと同じくらいの
心の痛みや苦しみを感じられないかもしれない。しかし、この悲惨な事実を風化させ
ないよう伝え続けることはできるのです。そして、戦争をしてはいけないことを胸に
刻むこと、戦争の愚かさを忘れないこともできます。

今回の広島派遣では、被爆された人たちの思いを感じ取ることができました。命は
一瞬にして奪われてしまう。私たちは、一人一人がかけがえのない存在だというのに。
切実に思うことは、今ある命を大切に生きていかなければならないこと、それこ
そが戦争で亡くなった人たちへ最大の感謝を伝える行動ではないかと思いました。

お互いを尊重して理解し、良い環境、良い関係を築くことができれば、争いや揉め
ごとのない社会を実現できると思います。世界中の人々が、平和を末永く保つには豊
かで優しい心を育んでいく努力を怠らないことだと思いました。もっと相手を思いや
る優しい気持ちが、世界にあふれていたら、こんなにも多くの人が命を落とすことは
なかったと思います。思いやりの気持ちを持ち、相手の立場になって考えること、こ
れが戦争をなくし、より良い平和な世の中にするための第一歩だと思います。私は今
回の経験を経て、多くの人に戦争の愚かさや、思いやりを持つことの重要性を伝えて
いきたいと思いました。



『平和の大切さ』

私は、今まで戦争や原爆のことについて、戦争はしてはいけない、原爆は怖いと思うくらいで、あまり平和などに対して深く考えられていませんでした。しかし、今回広島派遣に参加し、実際に見て聞くことで、戦争の悲惨さが伝わってきて、絶対に戦争はしてはいけないのだと実感することができました。

まず1日目の初めに、平和記念公園内の原爆ドームなどを見学しました。行って見ないと分からないような細部や裏側まで見ることができ、とても貴重ななと思いました。その後、被爆体験講話の聴講をしました。そこで講師をしてくださった佐渡さんの話を聞き、調べただけじゃわからないような実際に起こっていたことなどを教えていただき、人の心と心のふれあいは大切だなと思いました。このように話を聞くことができ、ここで聞いた話や佐渡さんの思いなどをたくさんの人に伝えたいなと思いました。

二日目は、平和記念式典に参列し、千羽鶴を奉納した後に平和記念公園内でインタビューを行いました。平和記念式典では、様々な年齢や国の人々が参列していて、平和などについて考える人が多いのかなと考え、そのような考えの人が増えたらいいなと思いました。そして、式典会場内の平和の灯が1日も早く消える日が来ることを願いたいなと思いました。千羽鶴の奉納の前に佐々木禎子さんの原爆の子の像を見て、自分たちに平和な未来への夢が託されているのかなと思いました。奉納では、自分たちも含めたくさんの千羽鶴を見て、この思いが多くの人に届くといいなと思いました。インタビューでは、3人の方にお話を聞き、共通して「平和とはどのようなものか」という質問をしました。そこで返ってきた答えがそれぞれ違うもので、平和とは一つではないのだと確信しました。そこで、平和という言葉でもいろいろなものがあり、戦争をしない事が平和というのも多くの人が納得するかもしれないけれど、人それぞれ過ごしてきた環境や日常生活も違うため考えも異なるから、これが平和だというものはないなと思いました。私が思う平和とは、今まで通りの生活ができ、みんなが仲良く過ごせることです。このように、個人個人が思う平和を願い叶えられたらそれこそ平和な世界をつくることができるなと思いました。

その次におりづるタワーと広島城を見学しました。おりづるタワーでは、自分で鶴を折って下に落としてどんどんたまっていくのを見て、平和の象徴だなと思いました。広島城では、上から周りを見渡して、一瞬で破壊された街がここまで復興し栄えていることが凄いなと思いました。

三日目は、多聞院と平和記念資料館と本川小学校平和資料館を見学しました。多聞院では、毎朝原爆が落とされた時刻の8時15分に鐘を鳴らしていると聞き、凄いなと思うのと同時に、少しでも多くの人が気づいて、この時刻に原爆が落とされたことなどを思い出すことができたなら素敵だなと思いました。次に、平和記念資料館に行きました。平和記念資料館では、被爆者の方々の写真や絵、被爆地に残された物の実物、衣服など様々な物が展示されていて、怖いと思うときや、心が苦しくなるときがたくさんありました。しかし、このような形で展示することで、戦争の悲惨さなどがより伝わりやすくなって、戦争をしてはいけないという思いも強く受け継がれていくのではないかなと思いました。写真と絵を比べてみると、絵の方がより悲惨な形に描かれていることが分かりました。それは、実際は写真で見ると強い光と熱だったのだなという風に思いました。

最後に、本川小学校を見学しました。本川小学校は、爆心地から一番近い小学校で、当時では珍しかった鉄骨でできた建物だからこそ残っていて、とても凄いなと思いました。原爆が落とされた後でも子供達が勉強をするために、窓もなくボロボロになった校舎にペンキで色をつけるなどして原爆のことを思い出して怖い思いをさせないようにしようとしていたことが素敵だなと思いました。

今回の派遣に参加して、とても貴重な経験がたくさんできて、たくさん平和について考え、戦争や原爆に対する思いが変わりました。実際に見て聞くことで、平和の言葉一つでも人それぞれ思いが違うこと、写真で私達が当時の様子を見るよりもずっと被爆者の方々は原爆が落とされた時に強い印象を受けたらろうということを感じることができました。これらのことから、本当に良い経験をすることができて良かったなと思いました。そして、ここで感じた思いなどをリレー講座や平和の集いなどでたくさんの方に知ってもらうために、伝わりやすいように工夫して、自分の言葉で伝えていきたいです。



『原爆を忘れないために』

私は派遣団として広島に行きました。学ぶまで原爆は過去の話で、自分にはあまり関係ないと思っていました。

一日目、原爆ドームと平和記念公園を見学し、被爆体験講話を聴講しました。原爆ドームを初めて目の当たりにしました。それまでは、漠然とドーム型の建物があるという全体像のイメージしかありませんでしたが、間近に寄るとコンクリートや鉄筋の痛々しさに目が行きました。被爆体験講話では、被爆者である佐渡郁子さんからお話を聞きました。瀕死の人に水を与えてはいけない。ぎりぎりの苦しみの中で水を飲んでしまった人間は、そこで安心して息絶えてしまうと聞き、助けたいという気持ちと与えてはいけないという葛藤があったのだと感じました。また、佐渡さんのお話の中で、「水が飲めないから草の汁を飲んで命をつないだ」という内容がありました。自分だったら我慢できずに、水を飲んでしまうと思います。

二日目は、平和記念式典への参列、千羽鶴の奉納、平和記念公園内で参列者や外国の方にインタビューを行いました。「なぜこの公園に来たのか」という質問には、式典に参列するため、奥さんが平和活動をしているから、平和の意味を肌で感じたかった、など様々でした。しかし、戦争は起こしてはいけないもの、惨禍を繰り返してはならないことという気持ちは、国や年代関係なく同じでした。平和記念式典は、朝早いにも関わらず、世界中の様々な国の人々が参列されていました。中でも、小学生が読み上げた平和の誓いは、平和に対する考えを自分の言葉で伝える姿に鳥肌が立ちました。

三日目、平和記念資料館の見学や多聞院、本川小学校の見学をしました。資料館では、皮膚が焼けただれた人の写真や、人の影がそのまま残っている壁など目をそむけたくなるような展示もありました。展示一つ一つが実際にあったことで、今もなお繰り返されようとしている惨禍であり、平和を訴えかけているようにも感じました。

爆心地から1.7キロメートルにある多聞院には、鐘楼が被爆当時のまま残されています。現在でも、毎朝8時15分に鐘をついていると聞き、原爆投下を忘れさせないための大切な取り組みだと思いました。私たちも実際に、鐘をつかせてもらいました。

本川小学校は、鉄筋コンクリート造の建物でした。爆心地から410メートルという近さで、全校児童と教職員420人のうち、助かったのは2人だけだったという記録が残っています。

私が派遣の3日間で一番印象に残ったことは、これまでテレビや本で見たことがあった広島と、平和記念資料館や現地を見た現実との違いです。資料館を進んでいくと、最初に当時の街並みや原爆投下の瞬間の再現CGがありました。さらに進んでいくと、亡くなった方の爪や焼け焦げた着物、遺体の写真などが展示されている部屋があります。私は展示を見るまで、皮膚が焼けただれた、後遺症により血を吐きながら死んだ、ということしか知りませんでした。

しかし、私はこの部屋の展示を見て衝撃を受けました。内臓や眼球が飛び出した人の写真、後遺症により体中に斑点ができた人の写真。正直、見ていて気分のいい展示ではありません。それは、自分がテレビや本では見たことのない初めての光景でした。何人が亡くなりましたという数字だけではなく、ひとりひとりが耐えられない痛み、苦しみの中で息絶えていったという現実を突きつけられたからです。

世界に目を向けてみると、現在も戦争をしている国もあれば、核兵器を利用して脅しをかけたり、いつ核兵器が使われてもおかしくない状況にあったりします。最初の私のように、過去の話だから、原爆が落とされたわけではないから関係ないと思っている人がいるかもしれません。他人事ではない、危険がすぐそばにあるということを自覚しておくことも、平和な社会を作るためには必要だと思います。

今回の派遣で、原爆の恐ろしさ、命の尊さなど様々なことを学ぶことができました。実際に被爆地に行った、被爆者の方からお話を聞いた私たちだからこそ伝えられることがあると思います。あの日の惨禍を二度と繰り返さないために、学んだ・知っただけで終わらせずに、リレー講座などで年代や国関係なく、伝えていきたいと思えます。



『広島に行って学んだこと』

8月5日から、8月7日を通して様々なことを理解することができました。1日目は、新幹線に乗って人生初の広島に行きました。原爆が投下されてから79年経った広島を見てみて、最初はまだ原爆が落ちたことで都市でも復興が続いているのかと思っていましたが、見たところ傷などもなくて広島市周辺しか見ていませんが、私の住んでいるところよりも都会のような感じがして、ここまで原爆が落とされてから復興するのにかなりの努力があったのだなと思いました。

次に路面電車に乗って原爆ドームを実際に見てみて、写真だけじゃわからないどんな感じで壊れたのかや、原爆による傷なども見られてこの建物が残っている限り、1945年のことは絶対に世界は忘れないと思いました。爆心地から1キロ以内だったのにも関わらずこのようにして今もなお残っている建物があるというのは奇跡だと思いました。

その次に、実際に被爆した佐渡さんの話を聞いて、当時の悲惨さを聞いて、本当に地獄としか表現できないなと思いました。「水を飲んだら死ぬ」「妹もろとも吹き飛ばされて妹の体にはウジが湧いていた」そんなにわかには信じ難いことが日本で起きて、100年経っていないというのがすごく怖くなりました。実際に世界では、広島に落とした原爆の比ではないほどの威力を持つものがごまんとあり、核を脅しに使ったり、実際に使おうとしたりしているのが世界の現状というのが普通になっては絶対にいけないと思いました。反省会でも、自分だけではなく他の人の考えていることや今日の課題などもわかって、とても質の高く価値のある1日となりました。

2日目は平和記念式典があり、日本の方だけではなく外国の方もたくさんいて、しっかりと知ろうとしているのは日本だけでなく世界でもそうなんだなと思いました。実際に式が始まった時は全員が静かに、そして真剣に聞いていて、とても緊張感がありました。広島市の市長や総理大臣の話や、各国から来た人たちが花を供えていたり小学生の2人が平和の誓いを言ったり、8月6日だけしか経験することのできない式典でした。千羽鶴を奉納した後、インタビューした時に妻が被爆した人、実際に被爆した人、外国の方から平和とは何かや戦争についてなどの意見をいろんな人の視点から聞けてとても良かったです。平和記念式典では、自分の想像を遥かに超えていた悲

惨さがありました。印象に残ったのは、原爆が投下された後のキノコ雲の高さが宇宙までいくのではないくらい高かったり、被爆した人の火傷や後遺症でどのように亡くなっていくのか、実際の死体の写真など正直見ていて恐怖や、とても申し訳ないと思ったが気味が悪いとも感じました。亡くなった人や後遺症になってしまった人は何も悪くないのに原爆によって姿までもが変えられてしまうということを理解すると、このような感情になってしまうのかと思いました。実際に資料館には悲惨さを隠したりせずにあるのままで見せていて、何か自分の死を想像したときの恐怖心のような、朝目が覚めたら戦場にいたというような感覚になりました。こんな悲惨なことが今起きたら、絶対に79年前よりも3段ほど上の悲惨さになることも想像ができると思いました。そのあとは折り鶴タワーや広島城に行って、楽しさもあり原爆のことも忘れないというシステムがとてもすごいなと思いました。

最終日には、今まで覚えたことも忘れずに新しいことをたくさん知ることができました。多間院でなぜ鐘を鳴らし続けているのか、それが忘れないためだと分かり、今までずっと続けてきているのもすごいと思いました。もう一度資料館に行ってもっと知りたいこと、2日目では見きれなかったところもしっかり調べられました。亡くなった人の服や遺品などをずっと保管していたり、原爆が日本に投下されたりした理由なども分かりました。自分が発見した方程式が原子力と核兵器の土台につながり、殺人の道具に使われてしまったアインシュタインさんの気持ちもわかったような気もしました。最後に本川小学校に行ってみ学した時は、1、2年生がいつものように登校していた時に一瞬で命がなくなってしまったこと、原爆投下後も旧校舎を使っていたということを知りました。子供なのに被爆して、友達や家族などが亡くなってしまった人が、当時の様子や被爆体験について、勇気を出して話しているのがすごいことなのだと思えました。

広島に行って原爆のことについて知ったということは、これからも忘れないし、まだこのことを知らない人にもリレー講座で教えていきたいと思いました。まだ教えることはできないのかもしれないけど、周りの人たちには教えられるので、理解して終わりというのは絶対にやらないです。そして、今もなお、核兵器がこの世界にたくさんある状況をなくすために、大人になっても原爆については学び続けて、少しの人だけでも理解してもらえるようにしたいです。広島だけでなく長崎の原爆についても理解したいと思いました。



『広島と平和』

我孫子市の広島派遣中学生を学校で募集された日、帰宅後すぐに母へ「行きたい！」と手を挙げたことを覚えています。その時の私は戦争や原爆についてどれだけのことが学べるか心躍らせていたように思います。楽しさをたくさん詰め込んだ心が広島派遣中にあんなに苦しくなるとは思いませんでした。

広島に行くまでは原爆ドームがあって、広島にはお好み焼きの美味しいお店がたくさんあることを知っているだけでした。戦争についても今、この世界の中で戦争が起きていると報道を見ている、それは自分の身に起こりうるのではなく、どこか非現実的なものであるという印象でした。

派遣初日。私が降り立った広島は戦争の傷跡が今もなお残されており、被害のあった街並みの写真を見ると戦争の恐ろしさがグッと現実に襲いかかってくるようでした。この恐怖が、ゾッとするような恐ろしさが今もなおロシアやウクライナ、世界のあらゆる場所で続いているのかと思うと、私は言葉を失いました。

派遣二日目。平和記念式典に参加しました。とても人が多い。広島の方々だけではなく、海外からの参加者も多くいらっしゃることに驚きました。日本の中の広島の平和記念式典には日本人しか参加しないのではないかと考えていました。「平和への誓い」を広島市内の小学生が行っていることにも感動しました。戦争を知らない私よりもっと若い世代が79年前の戦争について、そして平和についてご家族からのお話を基に思いを繋いでいったのだなと思いました。

広島平和記念資料館では、展示品や写真、ボロボロになった子供服、キノコ雲の写真、被爆者が描いた絵画の数々を見る機会がありました。直視できないほどの現実味を帯びた数々の展示品に思わず目を瞑ってしまうほどでした。静かで穏やかなはずの展示室で身体に痛みが走るような感覚と堪えきれなくなる程の涙が溢れそうになりました。「残酷」とは、「痛々しい現実」とは、このことなのかと膝から崩れ落ちそうになる程落ち込みました。しかし、同時に「平和」とは、「幸福」とは何なのか、しっかり向き合う心構えがそこでできたように思えます。なぜならそこには、原爆の被害後に我が子を抱いて幸せそうな父親の写真や、居なくなってしまった友人や家族の代わりに強く生きる姿も展示されていたからです。原爆で被害に遭い、被爆者の中には

「死ぬよりも辛い」と話されていた後遺症のある中で、必死にそれでも生きる姿に涙が溢れ、感動しました。

派遣二日目には広島の子の像の周囲にてインタビューも行いました。「あなたにとって平和とはどのようなものですか。」と、7名の方にインタビューすることが出来ました。その回答は驚くほど各々違って、驚きを隠せませんでした。その中でも、「戦争が無くなれば平和というわけではない」という回答に強く共感することができました。戦争がなく、恐怖を感じなくても、平和ではないという考え方に触れ、私自身も深く考えさせられました。たとえ衣食住が整い、経済的に満たされていたとしても、心の余裕や安寧がなければ、平和は訪れないのではないかと考えさせられました。

戦争はフィクションであり、非日常的なもの。そんな認識をどこかでしていた私は広島派遣で何度も心を痛めました。今もなお、戦争は現実であり誰かの日常を蝕むものであること。今もなお、核の恐怖は消えていないこと。原爆の被害により多くの教訓を得た日本でさえ、戦争にいつ巻き込まれるかわからないこと。その先には、私の大切な人が亡くなったり、消えない傷を心や身体につけられたりするかもしれないこと。この恐怖と今ある幸せを私は多くの方々に伝えていきたいと思いました。

「平和」とは、人に偏見を押し付け合うことや、人々が傷つけ合うことがなく、思いやりや、時には甘さを捨て厳しく教え合うことで、互いを理解し合うことで生まれるものだと考えます。戦争をなくす、また戦争を起こさないための対策もこれからは必要だと考えました。日常生活では仲違いした友人達が話し合いを持つことすらできず、互いを知る機会を逃していることがあります。そのまま、争いに発展することがあってはいけません。心の緊張を解き、少しずつ許し合えたら、その先には最高の友としている未来があるかもしれません。そんな歩み寄りや許しあいが世界に広がればいいなと考えました。

今後、リレー講座などで私が感じたことや被爆者の方から伺ったお話、思いを未来に繋げていき、少しでも平和な未来が実現されるようにしたいです。また、日々の感謝や周りの人との関係をより大切にしていきたいと考えます。



『私が思う平和』

8月5、6、7日と私は広島派遣団として広島に行きました。

1日目は広島に着き、路面電車に乗り、平和記念公園を見学しました。まず目にした物は原爆ドームでした。原爆ドームを見て私は、恐ろしいという感情が込み上げてきました。そして原爆ドームを近くで見ると爆発で壊れたというより、溶けた跡が残っていました。つまり原爆ドームは爆発で壊れ、高熱で溶けてあの姿になったとわかりました。私は広島に行く前、原爆ドームは全て爆発で壊れたものだと思っていました。やはり実際に目で見て感じることはとても大切だと、改めて感じる事が出来ました。

次に被爆体験講話の佐渡郁子さんのお話を聞きました。郁子さんは小学2年生の時に870m離れた祖母の家で被爆しました。そして4人いた家族はたった1人、郁子さんだけになってしまいました。それを聞き、言葉では言い表せないほどの心苦しく、悲しい気持ちになりました。原爆が落ちた瞬間、目を開けられない程の光と、もの凄い音と共に吹き飛ばされたそうです。3000℃から5000℃の熱で服は溶けてしまい「水をくれ」と人々が兵隊に頼み込んでいる姿が見られたそうです。ですが、兵隊は水を全くくれなかったのです。なぜかというと、水を飲むと亡くなってしまうからだそうです。水を飲んでしまった人は1人残らず亡くなってしまいました。郁子さんは兵隊の言うことを信じて水を飲まなかったそうです。そして、水の代わりに鉄道草という草を絞りその草の汁を飲んだそうです。その時私は、どうして水を飲んだら亡くなってしまうのに、草の汁を飲んだ人は亡くならないのかという疑問が湧きました。それを派遣生と話し合い、考察することが出来ました。その結果、水だとたくさん飲めて満足して安心してしまうのに対して、草の汁だと満足しない量しか飲めないから、生きたいという気持ちがより強くなり亡くならなかったのではいかという考えになりました。郁子さんの想いは「原爆の恐ろしさを伝えて欲しい」「人の命を大切に」「平和とは人間の心と心のふれあい」で、その一言一言にとっても感情がこもっていて、心に深く刺さりました。

2日目は、平和記念式典に参列しました。そこでは、外国人もたくさん参列している姿が見られました。私は、原爆を落としたのはアメリカ人なのに、どうしてアメリ

力人も参列しているのかという疑問が湧きました。それについても派遣生と話し合い、今と昔は違ってアメリカの人々も「平和でありたい」と思うようになったからではないかと考えました。式典後、千羽鶴を奉納しました。たくさんの千羽鶴が奉納されているのを見ました。平和を願っている人が沢山いるのだとわかり、私はとても嬉しく思いました。平和記念公園にいた人に「自分が思う平和とはなんですか？」というインタビューをしました。「戦争がない」「人と会話ができる」「あたりまえの日常が送れる」などのたくさんの意見が出ました。次に、平和記念資料館を見学しました。そこでは原爆が落ちた後の広島の写真が壁一面に貼ってあったり、焼け焦げたお弁当と水筒などが展示されていたりしました。目を背けたくなるような写真もありました。それを見て、今私たちが住んでいる日本で本当にあった出来事なのかと目を疑いました。写真を見ると家などはボロボロに崩れてしまっていたましたが、電柱や鳥居は崩れていませんでした。原爆の落ちる場所が1mmでもずれていたら、電柱なども崩れていたそうです。

反省会では、「平和とは」というテーマで話し合いました。話し合いで出た意見は「平和でありたいという想いは世界共通である」「平和の基準は人それぞれ違う」などの意見が出ました。私が思う平和は、戦争がなくなるということだけではなく、友達と仲良く話せることや、家族と過ごせることなど、当たり前のことが当たり前でできることだと思います。考えが深まり、またひとつ成長することが出来ました。

3日目は、多聞院を見学し、鐘を鳴らしました。鐘はいつも8時15分、原爆が落ちた時刻に鳴らしているとお坊さんが教えてくださいました。そしてその鐘は原爆が落ちても崩れなかったものの一つだそうです。鐘を鳴らしたあとに景色を見ると、歩いている人々がどうして鐘がなっているのだろうと不思議そうにこっちを見ていました。いつも8時15分に鐘を鳴らしている理由は、その鐘を聞いていつまでも戦争のことを忘れないで欲しいという思いからだそうです。その後には、本川小学校を見学しました。そこは、被爆した小学校の一部が残っていて、中の壁も黒くなっていて、黒板があったであろう場所も残っていました。

この3日間で原爆とはどれだけ恐ろしいものか分かりました。そして、命の尊さがよく分かりました。今私たちが、当たり前のように過ごしている日常を当たり前だと思わず、1日1日を大切に過ごしていけるようになりたいです。



『一人一人が考える平和』

僕は広島派遣で初めて広島に実際に行き、戦争や原爆など実際に起こった悲惨な過去について触れ、平和とは何か、なんで戦争はいけないことなのかについて考えることができました。また、仲間達と協力してとても楽しい派遣になりました。

一日目は、平和記念公園内の原爆ドームと被爆した方々の遺影を見ました。原爆は本当にここに落とされ、たくさんの建物が壊され、多くの人が亡くなったということを実感しました。もう日本は平和だからという考えは関係なく、戦争や原爆について学び、後世に伝えることの大切さを改めて感じました。その後、被爆体験者講話を聴講しました。佐渡さんの実体験の話は、大火傷を負った妹が亡くなり火葬したことや、避難した練兵所では兵隊の手によって生死を確認されないまま人々が火葬されたことなどとても悲しく、信じられないようなものでした。大切な人を失うなんて絶対に嫌です。しかし、そんな信じられないような辛いことが、実際に起きていた戦争や原爆の恐ろしさが分かりました。夜、食べた夕食はとても美味しく、楽しかったです。戦争について学んだあとの食事だったので、美味しく楽しくご飯を食べられることのありがたさや嬉しさを実感しました。

二日目は、平和記念式典に参加し、平和宣言や小学生の平和への誓いを聴き、声や表情から自分達为中心になって世界恒久平和と核兵器廃絶を実現しなければならないという強い意志を感じました。そして、その意志を広島に来て戦争や原爆について学んだ自分達が受け継ぎ、我孫子に帰ってもリレー講座などで学んだことを全力で伝えなければいけないと思いました。式典の参列者へのインタビューでは、自分よりも戦争について知識のある人や自分とは違う目線の外国の人などの意見や考えをきいて、自分の考え方が広がりました。日本の人も外国の人も「平和とは暴力や戦争がなくて互いを思いやることだ」と言っていて、人によって考え方は違うと思うけれど、暴力や戦争が無い平和な世界を望んでいるのは世界中の人が一緒なのだと思います。その後見学した平和記念資料館では原爆で亡くなられた人の遺品や、残した言葉や被害にあった人や町の写真、原爆によって壊された生活などについての展示を見て、原爆によって起きたことを自分事として捉え、被爆者の気持ちを考えることができました。一番印象に残っている展示は「N家の崩壊」という原爆によって母が亡くな

り、父も後遺症のせいで迫害され、やがて家族が崩壊していくという展示です。原爆は、残された人々の今後の生活をも壊すものだと分かりました。そして核兵器は無くさなければならないとより強く感じました。おりづるタワーでは、平和への祈りを込めて折り鶴を折ることができました。滑り台も上手く滑れなかったけれど、楽しかったです。反省会では、あまり自分の意見を出せなかったことを後悔しています。今後は、しっかりと自信を持って意見を言えるように頑張ります。

三日目は、多聞院というお寺に行って、鐘をついたり鐘の音を聴いたりしました。鐘の音は人を驚かせるものであり、今でも人々が8月6日の原爆投下の被害と平和を祈る気持ちを忘れないように、毎日原爆が投下された8時15分に鐘を鳴らしているという話を聴きました。僕もこの鐘のように原爆のことを語り継げられるように頑張ります。その後、平和記念資料館をもう一度見学した後、被爆建物である本川小学校を見学しました。ここでは、3年生から6年生は今後、戦争で兵士などとして使えるからと疎開させられ、残った約400人の1、2年生のうち、2人をのぞくほとんどが被爆し、爆心地から近いため即死したという話を聴きました。その話を聴いて僕は、自分達よりも小さい子ども達がたくさん亡くなったことと、中高学年の子ども達は貧しい暮らしをするしかなかったこと、いつかは兵士になって戦争に駆り出されるしかないという当時の状況に悲しくなりました。戦争は大人も子どもも関係なく自由な生活が出来なくなってしまうことだと分かりました。

僕はこの派遣で、戦争は絶対にいけないことだと強く感じました。世界中の戦争や核兵器がなくなって、一人一人が思う平和を実現させられるようになってほしいと思いました。そのためにも、リレー講座など自分達に出来ることは全力でやって、少しでも世界恒久平和の実現につながればいいなと思います。



『「ヒロシマ」を知って』

僕は、8月5日から7日にかけて行われた広島派遣に参加しました。この派遣に参加しようと思った理由は、主に二つあります。

一つ目は、間近で戦争や原爆について触れることができると思ったからです。日本が最後に戦争に参戦してから、79年が過ぎ、僕たち中学生にとって、戦争が身近ではなくなってきました。そんな中、世界で二か所しかない原爆の被爆地である、広島で実際に学べるのは、とても貴重なことです。自分としても、多くのことを吸収する機会になると思い、立候補を決めました。

二つ目は、広島で得た知識や、感じた気持ちを学校に持ち帰り、みんなと共有したいと思ったからです。先述した理由から、中学生が戦争について考える時間は少ないと思います。だからこそ、僕たちが、見たり感じたりしたことから、戦争に対する考えの変化や、新しい疑問などが生まれれば、それは大きな意味のあることになると思いました。

以上の二つの理由から、僕は広島派遣の参加を決めました。本当に行けると決まった時は、信じられないような気持でした。それと同時に、必ず意味のある派遣にして帰ってくることを心に決めました。

広島派遣当日、昼過ぎに広島に到着し、平和記念公園とその周辺を見学しました。広島に来て初めて見た建物は原爆ドームでした。広電の乗り場を降りてすぐの所で、あまりの悲惨さに思わず唖然としました。元々の名を、「広島産業奨励館」といい、多くの商業関連の施設や、飲食店が入ったにぎやかな施設でした。原爆は、南東約160メートル地点の上空600メートルで炸裂し、建物の片側は大破、全焼し、残った片側も瓦礫で原型も残らない状況になりました。最上部の円盤上の部分だけが鉄骨だったため、形を残しており原爆ドームの名前の由来となりました。

公園での見学を終え、場所を移して、被爆者の方に体験講話を伺いました。被爆者は佐渡郁子さんという方で7歳の時、爆心地から約870メートルの祖母の家で、妹と被爆しました。原爆で家族や親戚のうち7人の命を奪われました。妹は目の前で吹き飛ばされて、二日後に火傷で亡くなりました。佐渡さんは、爆音と共に、建物の陰に飛ばされましたが、火傷は奇跡的に腕だけで済みました。原爆で帰る家もなく、

しばらくの間、練兵所で生活したそうです。ただ、食べ物も少なく、兵隊から配られる乾パンで飢えを凌いでいました。また、学校も焼け落ちてしまったので、校庭に机といすを並べ勉強する、青空教室も体験したそうです。

原爆は多くの命を一瞬で無差別に奪うから怖いと思っていましたが、佐渡さんの話を聞いて、原爆で生き残ったとしてもその後の生活に苦しんだり、体だけでなく心にも深く傷を負うことになったりしてしまうということを知りました。そして、当たり前の生活のありがたさを改めてかみしめました。

二日目は、まず平和記念公園で行われる、平和記念式典に参加しました。朝早くからの開催でしたが、約五万人が集まり平和への思いを込めて、式典に臨んでいました。各国の代表らが献花した、原爆死没者慰霊碑には「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」と、刻まれており、過去を乗り越えて未来の繁栄に繋げたいという思いを感じました。

式典の後は、原爆の子の像の脇にある折り鶴掛けに千羽鶴を奉納しました。次に付近の人にインタビューを行いました。多くの方が答えてくれて、貴重な意見を知れてよかったです。インタビューを通じ、式典には様々な世代や、国、地域の方が来ていたとわかり、平和に国境はないと実感しました。

三日目は、平和記念資料館の見学をしました。資料館に入ると、まず被爆直後の広島を表した、巨大パノラマがありました。ほとんどの建物が跡形もなく瓦礫となっていて、電柱や鳥居、丈夫な建造物ほどこか街並みを感じさせる物は残っていませんでした。パノラマを抜けて、「被爆の実相」という展示を見に行きました。学徒動員で被爆地近辺で被爆した、学生達の遺品や当時の様子を記録した写真や絵が展示されていて、衝撃を受けました。

見学を終え、最後に本川小学校に向かいまいした。この小学校は広島に残る数少ない被爆建物の一つで、壁の傷やむき出しの鉄筋などが当時の惨状を物語っていました。中は資料館になっていて、ここで起きたことが、事細かに記されていました。

三日間を通し、まず派遣に同行して下さった方々に感謝したいです。時に目をそむけたくなるような事実も、教えてくれた広島から、そのことを忘れず、次は教える立場になれるように努力していきたいと思います。



『生きていること』

僕が今回広島派遣に参加しようと思った理由は三つあります。一つ目は平和について深く学ぶ機会が欲しいと考えたからです。普段平和とは何かを考える機会があまりないからこそ、皆で意見を出し合って考えようと思いました。二つ目は戦争の悲惨さを学び、考えたかったからです。戦争の悲惨さを実感し、事実と向き合い考えることができると思いました。そして三つ目は広島で学んだことをたくさんの人に伝えることで自分でもきっと新しい気づきがあり、聞いた人も新しい気づきがあると思ったからです。そして僕が今回行ってみて感じたこと、学んだことを三日間に分けて紹介します。

まず一日目は広島に着いて最初に平和記念公園を訪れました。そこで最初に原爆ドームを見学しました。原爆ドームは1915（大正4）年に広島産業奨励館として建設されたそうです。そんな原爆ドームは写真で見ると実際に見るので全く印象が違っていたと思います。僕が最初に写真で見たときは原子爆弾で壊れた建物で残っているのはすごいと感じました。ですが実際に見てみると焼け焦げた跡、溶けてしまった鉄骨やコンクリート、崩れている外壁、何もない建物の内部の様子、本当に原爆が投下された痕跡が残っていて正直恐ろしくて目を疑いました。それと同時に戦争の残酷さを感じました。

その後、爆心地である島病院を見学しました。1945（昭和20）年8月6日午前8時15分、島病院の600メートル上空で原子爆弾はさく裂したそうです。爆弾投下後約3000度から4000度の熱風と爆風や放射線を受け、ほとんどの人が瞬時にその生命を奪われたそうです。それを知って僕は驚愕しました。一瞬で多くの尊い命が失われてしまうことが本当にあるのかと思いました。そして夕方には被爆体験講話の聴講で被爆体験証言者の佐渡郁子さんのお話を聞きました。佐渡さんは爆心地から870メートル離れた上流川町で被爆したそうです。被爆したときには水を飲むと死ぬと言われて、草の汁を飲んでいたら時もあったそうです。そのお話を聞いて、被爆してものすごく暑い中で水が飲めず、食料も少ない状況でもくじけずに生きてこられたのはすごいと思いました。

二日目は平和記念式典に参加しました。その中で平和宣言や、平和への誓いがとても印象に残りました。広島市長も子供代表の方も平和への祈りの強さを感じました。本当に貴重な経験になりました。その後平和記念式典に参列された方にインタビューをしました。そこで僕たちのグループは外国の方にインタビューをしました。アメリカの方に「平和とは何ですか？」という質問をしました。その方は「争いなく互いに思いやれることだ」と言っていました。海外の方も平和について考えていることを知り、とても嬉しかったです。最後に広島城の見学に行きました。広島城では原爆を受けても残った石垣が残っていて溶けたような跡が残っていました。原爆を受けてもしっかりと残っていてすごいと思いました。

三日目はまず多聞院の見学をしました。そこには当時から残っている鐘楼がありました。梁が割れていて天井の木材も少し割れていました。そして住職の方が毎日8時15分に鐘をついているということを聞きました。原爆が投下された時刻に鐘をつくことで惨劇を忘れないように、日常のありがたさを感じてもらえるようにしているそうです。僕たちも原爆が落ちた当時その時刻にどんな光景だったかを想像して聞きました。その後平和記念資料館を見学しました。その中には原爆の被害を受けて苦しんでいる人の絵や写真、原爆症の症状が出てしまっている子の写真、当時の状況がよくわかる手記などがあって本当に79年前に現実で起きた悲劇だと実感しました。原爆一つでどれだけの命が失われるのかがよくわかりました。そして最後に本川小学校を訪れました。本川小学校では当時外にいた子供たちの多くが犠牲になったそうです。また、当時教室のガラスが割れたり外壁が焦げたりしていて、とても学校として使える雰囲気ではありませんでした。

僕が広島派遣に行ってわかったことは、人それぞれにそれぞれが思う平和があるのだということです。僕は、戦争さえなくなれば平和だと思っていました。しかし、戦争がなくなれば必ずしも平和なわけではなく、戦争や争いが無いのはもちろんのこと、日常が当たり前で生きられていることこそが平和であり幸せなのだと思います。戦争について知り、考えることも平和への一歩なのだと感じました。僕が思う平和は皆が日常を当たり前で過ごせて、お互いを尊重しあうことだと思います。これから沢山のの人に伝える立場として学びを深め、発信していこうと思います。



『当たり前に感謝を』

私が広島派遣に参加したいと思った理由は二つあります。一つ目は、雄飛祭で派遣中学生の先輩の広島派遣の発表を聞いて興味を持ったからです。二つ目は、自分を変えたいと思ったからです。私は戦争のことなどを聞いても他人事として考えてしまうことが多く、自分事としてとらえることができていない、そんな自分を変えたいと思ったからです。

広島と長崎に原爆を落とされた、多くの人が亡くなってしまったということだけは知っていましたが、実際広島に行って、原爆ドームや被爆者の佐渡郁子さんのお話を聞いて、平和記念資料館を見て、今も被爆者の方々が生きて、体験談を話してくださっていることやすさまじい威力の原爆の被害を受けた建物が今でも残されていることなどを知り、次の世代に語り継いでいかなければならないことを実感しました。

平和記念公園周辺の見学の時に原爆ドームを見ました。広島で被爆者体験講話、佐渡郁子さんのお話では、想像もできないような恐ろしい当時のことを聞きました。水が欲しくて兵隊さんに頼むと「水を飲んだら死ぬ」と言われ、水をもらえず草を絞って草の汁を飲んで生き延びたことや、水の欲しさに多くの人が川に飛び込み亡くなってしまい川に多くの死体があったこと、まだ生きていますか死んでいるかわからない状態の人たちを山にして火葬していたことを聞いて生きていくことすら嫌になるような地獄ともいえる生活を送っていたのではないかと思います。

平和記念式典に参列してみて、多くの方が来ているところを見て、被爆者の方や当時の広島に向き合っている人が多くいることがわかりました。

インタビューして、他グループと意見を交換してみて、一人ひとり思っていることは違っても命を大切にしていることは変わらないこと、当たり前のことを当たり前に行うことの幸せ、平和とは戦争がなくなるだけではなく、人によって基準は違うと知ることなのではないかと考えられました。

平和記念資料館を見て、ボロボロになった服や変形した弁当箱、眼鏡など、当時の被爆者の方の遺品や詩、絵、日記、写真、持ち物など実物などを見て被害の大きさや被爆者の苦しみが伝わってきました。

本川小学校平和資料館を見て、黒く焦げているけれど、ちゃんと建っているように

見えました。中に入って説明を聞いていると、教室の壁の跡や原爆が落ちた後授業を寄せ集めのものになっている写真が残っていました。本川小学校平和資料館の地下に展示されてあった原爆ドームの崩れたかけらや原爆を落とされる前の広島模型があり原爆を落とされた高さなどがわかり、原爆の威力がすさまじかったことを再認識しました。そんな恐ろしい原爆で被爆した本川小学校は当時珍しい鉄筋コンクリートを使用した建物だったため崩れなかったそうです。被爆建物になった後も本川小学校は私たち人の学びの場というのは変わらないのではないかと思います。

私は広島派遣を通して、人がそれぞれの価値観で生きていられること、楽しいと思えることは、当たり前ではないと思いました。そして、戦争のない世の中がすばらしく、そう思えることが本当の「幸せ」なのではないかと思います。平和とは人それぞれ考えは違うけれど、戦争がないということは共通なのではないかと思います。

私が広島派遣に行きたい理由にも書きましたが、私が先輩の発表を聞いて興味を持ったように、私から多くの人に話をできるようになりたいと思いました。もう一つの理由の自分事としてとらえることができないということが、実際広島に行ってもその時この場にいたらと考えることができたので、これは自分事としてとらえるということの成長の第一歩を踏み出すことができたと思います。これからもっと成長できるようにしていきたいです。

広島や長崎ではたった一つの原子爆弾によって多くの被害を受け、今でも原爆により苦しんでいる被爆者の方がいます。被爆者の方々が思い出したくもないであろう地獄とも呼べる日々を語って、教えてくださったことを私たち派遣中学生がこれからの人たちに原爆や戦争の恐ろしさ、広島でどんなことがあったのかを知ってもらい、もう戦争が起きないような誰もが平和だと感じる世の中になるように多くの人たちに話して広めていきたいです。



『平和の尊さ』

この度、僕は令和6年度の広島派遣団として原爆の恐ろしさや、平和の尊さを学びに、広島へ行ってきた。

僕は広島へ行くのが初めてだったため、少しの楽しみと緊張が入り混じった気持ちでいた。でも、目的地に着くまでは楽しい仲間達と共に会話やゲームをしたことで絆を深め合うことができ、リラックスできた。関東地方から中国地方までは思っていたよりも早く、あっという間に広島に着いた。新幹線から体を外に出した瞬間、体に再度緊張が走った。周りを見渡すと、仲間達も真剣な表情で、派遣中学生としての目的を思い出し、緊張しているような気がした。

一日目の初めは原爆ドームを訪れた。電車に乗り込み、「原爆ドーム前」という看板を目指している途中で仲間がお年寄りに座席をゆずるほっこりとしたシーンが見られて感動した。見ている方もうれしかった。目標地へ到着したと同時に感じる独特な何か。そして数十メートル歩いた先に見てしまったのだ。目に映ったもの。それは、「原爆ドーム」であった。写真やインターネットなどでよく目にすると思われるが、実物を見て僕は大きなインパクトと衝撃を目の当たりにし、言葉が出せなかった。元の姿と比べてみるとまるで別の建物に変わり果てていた。すぐには現実を受け入れられないまま爆心地である島病院へ。原爆の威力など貴重な情報を教えてくれた。少し移動した後、平和記念公園周辺を散策。昔ここに原爆が落とされたとは思えないほど綺麗だった。また、そこで鳴いていたセミの鳴き声が、平和な時間を感じさせてくれるような雰囲気を出していた。他にも、被爆体験講話では胸苦しい中、聴かせてもらった。講話をして下さった佐渡さんの口からは信じがたい事実が数えきれないほど語られ、僕の心に突きささった。生きるために水ではなく、草の汁を飲んでいただけという佐渡さんを想像したら、必死に一秒一秒を生き抜いていきたいという思いが原爆の恐ろしさと共に一気に体に湧き上がってくる感じがした。一日目の反省会では、もっと自分に積極性を増すことが課題として挙げられた。また、新しい行動班員と共にインタビューの内容を考え、一日目にしてはとても内容の濃い一日だった。

二日目では、メインイベントである平和記念式典に参列した。日本人だけでなく外国から来ている人もとても多かった。それを見て僕は日本に落とされた原爆の問題は

国境をこえて世界中に共有されており、そのためにはるばるこのイベントに参列しているのだと感じることができ、感動した。また、小学生の演説の語りかけを見た平和記念式典に参列している人々が、これから平和な日本にするためにどうしたらよいのか真剣に考えさせられているのだなと思った。式典後にはグループでインタビューを行い、参列者の平和に対する想いをたくさん聞くことが出来た。中でも、「戦争は絶対反対」というワードはみんな同じだった。外国人へのインタビューもあり、英語での会話に苦戦することもあったが、インタビューすればするほど、共感できたことが多くなってとても喜ばしかった。その後は平和記念資料館へ行った。実際にどのような被災であったか絵や写真で見てわかり、見る度に胸が苦しくなった。また、原爆の破壊力も計り知れない程だった。僕はここに来てまた改めて戦争はやってはいけないのだなと感じた。いや、確信した。他にも広島城などの被爆関連施設を見学したりして改めて気付かせられたことが多かった二日目であった。

三日目の最初は多聞院へと向かった。そこは原爆によって被爆された建物が残っており、毎朝8時15分に鐘を鳴らしている。鐘を毎朝欠かさず鳴らすことで昔起きた悲惨な出来事を忘れさせないようにし、みんなで広めていこうという想いがあふれているのだなと感じた。そして原爆ドームと同じ、被爆施設である本川小学校も見学した。被爆した建物に足を踏み入れるのは初めてで少し緊張した。中に入ると壁が変色していて、被爆したという実感がわいた。ガイドさんの話では、10秒で広島は滅び、「助けて」という一言すら、考える間も言う間もなく死んでしまった子供達がたくさんいたと聞いた。とても虚しい気持ちになった。他にも、知らなかったことをたくさん教えていただいた。そんなガイドさんの一言一言はとても力強く、私たちに後世の人に伝えていってと言っているかのように聞こえた。いつか僕も人前に立って広島について語り継いでいく時が来るのだろう。そう考えながら本川小学校を後にした。

原爆ドームは最初に見た時の印象と原爆についての知識を得た後ではまるで別物に見えた。これからの「戦争」のない世界というものは願っているだけでは訪れない。だからこそ、「平和」の尊さについてこれからもみんなで考え、伝え続けていきたいと広島派遣を通じて、思った。



『原爆の恐ろしさ』

1945年8月6日8時15分。広島に原子爆弾が落とされた。それから79年経った今年、私は我孫子市の代表として広島へ派遣されることになった。8月5日から7日の3日間、私たち派遣団はたくさんものを見て、たくさんことを学んだ。私はこの派遣を終えて、「原爆の恐ろしさ」について、世界の人に考えてほしいと思う。

1日目は平和記念公園とその周辺を見学し、被爆体験講話に参加した。初めて原爆ドームを目の前にし、驚いた。よく見ると鉄の部分がむき出しになっている。原爆の威力がどれほど恐ろしいものか、具体的な数値を見るより実感が湧いて複雑な気持ちになった。1日目の中で最も心に残ったのは、被爆体験講話だ。この時、原爆についての具体的な数値や、どんな被害があったのかを初めて知った。中でも驚いたのは水や川の水を飲んだ人は次々に亡くなっていったということ。原爆によって放射線物質が大量に降り注いだため、どんどん人が倒れていったそうだ。正直私は原爆の被害はみんなやけどで熱くて死んでしまったのだろうなと軽い気持ちだった。でも、放射線の被害もあったと初めて知った。

放射線の被害といえば2011年に東日本大震災が起きた時のことを思い出した。私はまだ0歳の時の事だったため、もちろん覚えていない。しかし母の話によると、私が住んでいる我孫子市付近は「ホットスポット」だったという。庭の表面の土を削って放射線の数値を調べるとすごい数値が検出されたと言っていた。そのため私は小さいころあまり外で遊べなかった。写真を見返してもほとんど室内で遊んでいるものばかりだった。だが原爆投下による放射線の被害はこれとは比べ物にならないレベルだと感じた。

2日目は平和記念式典に参列した。前の方の席には多くの遺族の方や色々な国の代表の方が参列しているのも見えた。広島市議会議長の式辞、広島市長の平和宣言、内閣総理大臣や広島県知事などの挨拶を聞いて特に心に残ったのは平和への考え方についてである。話しているのは同じようなことでも少し意見が違っているように感じた。派遣団の中での話し合いなどから私は、皆が安心安全に暮らせることだと考える。戦争や核兵器のないことが平和、というわけではないと思う。みんな仲良く、安

心して生活ができる状態が平和なのではないかと私は思う。世界から戦争や核兵器がなくなるということは平和への第一歩なのではないだろうか。

2日目と3日目の二回、平和記念資料館を見学した。遺族から提供された展示品をみると、実際の被害の大きさがよく分かる。また、絵や写真などにたくさん子供が写っていたり、描かれていたりで少しげんなりした。展示品や説明文を見て多くのことを学んだが、それよりも海外の方がすごく多いことに私は驚いた。平和記念式典に参列したときも海外の方が何人もいて、「海外の方も原爆について考えてくれているのだな」と思った。それと同時に、唯一の被爆国である日本は「戦争や原爆、核兵器はもう二度と使ってはいけない」ということを世界に伝えられるチャンスではないか、とも思った。広島に来て式典に参加しているということは関心を持ってくれている海外の人が多くということだ。例えば、世界中の人に情報を発信する手段としてSNSがある。話題性のある動画や記事を発信し、スマホ一つで手軽に戦争や原爆による被害について知って、もっと世界の人々に身近に感じてほしいと思う。でも、これらのことは今の私には少し難しいだろう。だからこそ、私は身近なことから始めていきたいと思う。家族や友達、親戚などに私がこの派遣での経験を伝える。また、派遣生でないと行えないリレー講座に積極的に参加して小学生に戦争や原爆について知ってもらうなど、今からできることは他にもたくさんあると思う。

私は派遣に行く前まで戦争や原爆についてあまり知らなかった。でもこの派遣をきっかけに、原爆の恐ろしさを実感することができた。貴重な体験をさせてくださった市の方、広島でお世話になった方や、被爆者の方への感謝の気持ちを込めて、今後、戦争や原爆の恐ろしさを後世に伝えていく。そして、この活動を行うことで核兵器のない、みんなが安心して暮らせる、平和な社会を実現できるといいと思う。



『平和をつなぐバトン』

私は小学校6年生の時にリレー講座を受け、初めて原爆について知りました。それまでの私は広島に行ったことがなく、広島といったらお好み焼きとかもみじ饅頭しかイメージがなかったですが、リレー講座をきっかけに原爆や戦争について考えるようになりました。それが広島派遣を希望したきっかけです。3日間の派遣では、原爆ドームをはじめとした見学だけでなく、被爆体験者の講話を聞きました。

1日目は原爆ドームや平和記念公園の周辺を見学しました。原爆ドームは、今まで写真でしか見たことがなく、写真を見ただけでは本当にこのような被害があったのか信じることができませんでした。広島に行き実物を見て改めて原子爆弾の恐ろしさを感じました。平和記念公園の周辺を見学し、特に平和記念公園にある原爆死没者慰霊碑に刻まれた「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませぬから」という文字が印象に残りました。この文字を見て、原子爆弾によって多くの人の命が奪われてしまったことがわかりとても心が苦しくなりました。

見学後、被爆体験者である佐渡郁子さんの講話を聞きました。実際に被爆した人の体験を、佐渡さん自身の言葉で聞くことができ、改めて原子爆弾の恐ろしさや威力を実感しました。講話では被爆の瞬間、被爆直後の様子を聞くことができました。原子爆弾が投下された時の温度が3000～5000度と聞き、とても今の自分では当時の光景を想像できませんでした。当時、水を飲むな、と言われた佐渡さんはどんなに熱く、苦しくても水を飲まず草の汁を飲んだ、だから今生きていと語っていて、私なら欲に負け水を飲んでしまうと思いました。佐渡さんの生きようとする強い気持ちを感じました。佐渡さんが被爆体験者として、私たちに伝えてくれた核兵器の恐ろしさや平和に対する想いをこれからも忘れず、受け継ぎ、次の世代に伝えていきたいと思いました。

2日目は平和記念式典に参列しました。式典には若い人から高齢の人、外国の方など様々な方が参列していました。原爆を落とされたのは日本ですが、様々な国の人も参列していて、戦争や原爆、核兵器は日本だけではなく世界中の人が関心のある出来事なんだなと思いました。また、平和の誓いを聞いて、79年前に起きた事を過去の

ことだからといい、他人事と考えるのではなく、もし自分の身に起きたらと考えることが、平和への第一歩につながっていくんだなと思いました。平和記念資料館の見学では、当時の惨状を深く知ることができました。資料館に展示されている写真や絵を見てみると、皮膚が垂れ目玉が飛び出ていたり、当たり前で過ごしている日常が一瞬にして奪われてしまったことがわかりました。

見学後、1日目、2日目で感じたこと、考えた事をみんなで共有し、「平和」とは何かについて考え、話し合いました。戦争がないこと、ご飯が食べられること、学校に行けることなど様々で、人によって平和の考え方は違ったけど、違うからこそ、これからも平和について考えていきたいなと思いました。

3日目は、多聞院と本川小学校を見学しました。多聞院では、鐘の音を聞きながら当時の様子を想像しました。1日目では、まだ信じることができず、想像できませんでしたが、3日目では、佐渡さんの話、資料館の見学などを通して、79年前の悲劇を知り、今私たちが過ごしている当たり前の日常が一瞬で壊れてしまった事を想像せざるを得ませんでした。本川小学校では、被爆した校舎を実際に見ました。自分たちより小さい子が亡くなってしまったと聞き、とても心が苦しくなりました。

この3日間を通して、実際、広島に行かないとわからないこと、感じられないことがたくさんあり、戦争や原爆について、そして平和とは何かを考えることができました。最初は、目を背けたくなるようなこともあったけど、被爆体験者が私たちに伝えてくれたことを忘れずにこれからも平和について考え続けていきたいです。被爆体験者が少なくなってきた今、これから先、79年前起きた事を伝えていけるのは私たち派遣生だと思います。「派遣が終わったから」ではなくて、これからあるリレー講座や様々な活動を通して、今回感じた事、考えた事を少しでも多くの人に伝えていきたいです。



『平和の中で“生きる”こと』

8月5日から三日間過ごした広島市。初めて見た広島は、発展していてきれいな街だった。そこから路面電車で移動して原爆ドームを見上げて、やっとここは被爆した、大きな被害のあった街なのだと実感した。きれいな街には似つかない外観でどっしり建っている原爆ドームは戦争の悲惨さを訴えているように思った。

佐渡郁子さんの被爆体験講話では、戦争をより近くに感じ、心に響くものがあった。はじめは、戦争がある時代に生まれていたら、被爆していたらと考えてみてもなんとなくしか想像がつかなかった。佐渡さんは、戦時中、いつ爆弾が降ってくるかわからない状況で毎日生きるのは辛く、悲惨だったとおっしゃっていて、死と隣り合わせでも一生懸命生きていくのは体だけでなく心もボロボロになると思った。お話の中で印象に残ったのは、「水を飲むと死ぬ」ことについてだった。どんなにのどが渴いていても兵隊さんを信じて水を飲まなかった佐渡さんだったが、もし自分が同じ状況だったらと考えると、私はきっと耐えられなくて水を飲んでしまったと思う。また、妹さんもやけどで亡くし、辛い状況でも必死で生きようと草の汁を飲んで命をつないだ佐渡さんは、強い人だと思う。実際に被爆した佐渡さんの経験や思いを聞いて、被爆した方の気持ちを完全に理解することはできなくても、自分の中で辛さや悲惨さが少しわかったような気がした。苦しい記憶を思い出して話していただいたので、この想いを直で聞いて学んだ貴重な時間は絶対に忘れてはいけないと思った。

二日目の平和記念式典では、外国の方が多く参列していたり、いろいろな世代の方の思いや祈りを聞いて、平和を願う思いは多くの方が持っているのだと改めて感じた。この式典は戦争の恐ろしさ、平和の尊さを考えることができる大事なもので、絶対に途絶えさせてはいけないと思う。インタビューでは、まずアメリカから来たというお二人に声をかけた。平和式典に参列するために遠くから広島へ来たそうだ。その男性は、悲しいけれど大事なことだとおっしゃっていた。次に声をかけた方は神奈川と東京から来た三人の方で、二人は視覚障害がある方だった。去年は来たかったけど来られず、やっと今年来ることができたそうで、遠くから多くの方が足を運ぶほど広島は平和について学ぶことができる大事な街なんだと思った。お二人は小学生が語った祈りの言葉を聞いて、心がこもっていて思いが伝わったと話した。総理大臣は用意

した原稿ではなく心で話して欲しかったそうで、原稿をみていたか、小学生がどんな表情で話していたかを目でなく心で感じ取って考えていたんだと思った。

平和記念資料館の見学では、衝撃の強い展示ばかりだったが、その展示から多くを感じ取るために必死に考えてまわった。多くの展示があり、写真や被爆した子供の服、家の外壁まで様々だった。その中でも特に印象に残ったのは、原爆の惨状を絵にかいて残した人のことだった。「血を吐きながら亡くなった弟」という絵では、血まみれで目を閉じる子供の姿が描かれていた。原爆の記録を自分の絵で残すのは覚悟が必要だと思うし、それが自分の弟の亡くなる姿となると相当な苦しみがあったと思う。被爆した方が残した写真や絵の中には、「核兵器を落とされるとこんな地獄が待っている。絶対に使ってはいけない。」というような心の叫びが聞こえてくるような気がした。

「平和とは何か」これは、人それぞれ違う答えを持っていた。インタビューの中でこの質問をすると、暴力なしにお互いを思いやること、周りの国と仲良くする姿勢を持つことといった答えを教えてくださいました。私は今、平和に暮らしていると思う。戦争のない日本で、毎日学校に行けて好きなスポーツをしておいしいものをみんなで食べることができる。広島に行く前は、戦争がなくなれば平和になるのかな、といったふわっとした考えだった。しかし、戦争について深く学ぶと、今の世界も平和な世界とは完全に言い切れないと思う。「平和」＝「戦争がないこと」ではない。私は戦争をしないことは平和への一歩で、自分の中で安心して笑って過ごせること、怯えず暮らせることだと思う。この三日間、広島で学んだことは絶対に忘れてはいけない。資料だけでなく、実際に被爆した街を見たり、お話を聞いたり貴重な経験を心に刻み、自分が感じたことをたくさんの人に伝えていきたい。



『未来の平和のために』

原爆が投下されてから79年の月日が経ちました。私は今年、我孫子市を代表して広島派遣に参加しました。広島に到着した時、見渡す景色は明るく生き生きとしていて、人々を襲う恐ろしい出来事は過去に本当に起こっていたのかと疑いました。

しかし、平和記念公園や資料館の見学、式典、被爆体験講話などを通して、戦争や核兵器の恐ろしさ、平和の尊さについて改めて考えることが出来ました。

平和記念公園や原爆ドーム、資料館の見学では、インターネットでは感じ取ることの出来ない、原爆投下による悲惨さや平和の尊さを実感しました。資料館には、当時の人々や街の写真、絵、遺品などが展示されていました。時には、目を背けたくなるようなものも沢山ありましたが、過去に起きたことを受け止め、私達がつなげていかななくてはならないと思いました。多くの人に過去の悲惨さを伝え、この先の未来も平和であることを祈り続けたいと思います。

被爆体験講話では、当時爆心地から870m離れた上流川町にいた佐渡郁子さんのお話を聞きました。4人家族でしたが、妹、父、母の3人とも亡くなってしまったそうです。私とその立場だったらと考えると、佐渡さんの強い心に感銘を受けました。

広島は当時、人口35万人でしたがそのうち12万人が亡くなりました。「ピカッ」

「ドーン」となった瞬間吹き飛ばされ、妹は火傷で覆われ、佐渡さんの腕には今も火傷の跡が残っているそうです。一瞬の間で体も服も焼けてしまい熱線はとても恐ろしいものだと感じました。被爆体験講話を聞き私は、「忘れないことの大切さ」に気付きました。佐渡さんは、原爆投下の瞬間やその後の苦しみを語り、当時の恐怖や悲しみの深さを伝えてくれました。また、最後に「二度と同じ過ちを繰り返さないために、戦争や核兵器、原爆の恐ろしさを次の世代に伝えてほしい」と話していました。未来の平和を守っていくために今、やるべきことが沢山あると気付かされました。

平和記念式典では、多くの方々が参列されていました。式典が始まると、二度と同じ過ちを繰り返さないよう恒久平和を祈る、厳かな空気が広がっていました。8時15分に行った黙祷では、未来に希望をつなぐために私達の責任の重大さを感じました。私が特に心に残ったのは、こども代表が行っていた平和宣言です。言葉一つ一つに気持ちがこもっていて心に強く響きました。恒久平和のためにやるべきことがあ

る、戦争や核兵器、原爆の恐ろしさ、そして平和の尊さを私達と一緒に次の世代へ伝承していこうと言われていたような気がしました。他人事ではなく、自分事としてとらえることが平和への一歩につながるのだと思います。

グループで行った平和記念公園内にいる方へのインタビューでは、全員が平和について考え、話してくださいました。平和の基準は一人ひとり違うけど当たり前を当たり前前にできること、自分らしく生きられることが平和なのだとは思います。当たり前の日常があることに感謝しながら、今後の生活でどんなに辛いことが起こっても未来に向かって歩み続けることが大切なのだと思いました。

私は広島派遣に参加するまで、原爆や戦争、核兵器について知らないことばかりでした。しかし、実際に広島を訪れることで、原爆の歴史やその影響を五感で感じ平和の尊さを改めて実感することができました。また、我孫子やインターネット、教科書では感じられない思いや考えを持つことができ、とても貴重な経験になりました。被爆体験者は減少し、原爆や戦争、核兵器の恐ろしさを知らない人が増えている今だからこそ、私達が率先してその歴史を伝承していかなければならないと思います。積極的にリレー講座に参加したり、周囲の家族や友人、学校など身近な人に、戦争や原爆の恐ろしさを伝えたりするなど、今出来ることは沢山あります。未来の平和のために、自分が出来ることから始め、次の世代への継承に貢献していきたいと考えています。

そして、未来も平和であり続けることを心から祈っています。